

内部質保証のために学修時間の質・量を向上させる仕組み： データに基づく検証システム（IR）と組織的な改善活動

橋本智也

京都光華女子大学（EM・IR部）

背景と目的

現在、高等教育へのアクセス向上やグローバル化に伴い、教育の質保証が日本を含め国際的な課題となっている（宮浦他，2011）。日本においては、教育の質保証を進めていく手段として、「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」（いわゆる「質的転換答申」）で着目されるなど、質を伴った学修時間の増加・確保に関心が寄せられている。

このように、質を伴った学修時間の増加・確保が着目される中、学生の学修時間がどのような状況であるかについては、学生の主観的な評定データを使った実態調査や、学修時間と学生の特徴（授業の効用感や成績など）との関係についての分析など、これまでに研究が積み重ねられてきている（例えば溝上，2009）。

しかし、質を伴った学修時間の増加・確保を具体的にどのような仕組みで進めていくかについては、研究の蓄積が十分ではない。それに対して、京都光華女子大学では単位制度が想定する学修時間を前提としつつ、「教員が担当科目に想定する授業外学修時間」と「実際の学生の授業外学修時間」の差異を学科ごとに比較検証し、その結果を用いて組織的に改善していく取り組みを行っている（Hashimoto, in press）。現状の学修時間が適切であるかを検討していくためには、学生側のデータだけでは不十分であり、教員が想定する学修時間の把握が必要であるという課題意識が取り組みの背景にある。

質を伴った学修時間の増加・確保を進めることについて知見が必要（大森，2012）であるため、取り組みについての具体的な情報を提供することは意義があると考えられる。そこで、本研究では、知見の蓄積を目的として、「教員が担当科目に想定する授業外学修時間」と「実際の学生の授業外学修時間」の差異の調査・分析方法と、状況改善に向けた学内の体制整備について報告を行う。

方法

調査・分析には、①学内で実施している「学生による授業評価」（いわゆる授業アンケート）のデータと、②教員へのアンケートのデータを用いた。①と②のデータには科目を識別する値として「授業コード」が含まれている。

①学生による授業評価

大学と短期大学部の全学部・学科（3学部7学科）の全学年の学生を対象として、学内ポータルサイト「光華navi」の授業評価機能を用いてオンラインで実施した。平成26年度前期の科目を対象として、学生が受講科目について科目ごとに評価を行った。分析には、設問「この授業の予習・復習（課題・宿題の時間を含む）を一週間のうちどの程度したか？」の回答データを用いた。選択肢に対して、以下の通り時間を単位として換算を行った。

- ・ 0分(なし) → 0時間
- ・ 30分未満 → 0.25時間
- ・ 30分以上～1時間未満 → 0.75時間
- ・ 1時間以上～2時間未満 → 1.5時間
- ・ 2時間以上 → 2.5時間

回答率は大学と短期大学の合算で59.4%(1,079名/1,817名)であった。

②教員へのアンケート

全学部・学科の専任教員に対して、平成26年度前期の担当科目一覧(Excelデータ)を配布した。教員は各科目について、想定する授業外学修時間を0.5時間単位で記入した。

結果と考察

①学生による授業評価のデータと②教員へのアンケートのデータを用いて、学科ごと、授業形態ごとに散布図を作成した。①と②のデータの紐付けには授業コードを用いた。作成した散布図のイメージを図1に示す(架空の値を用いて作図)。

結果は意思決定を担う会議(学部長、事務局長、複数の事務部署長などで構成、学長が陪席)で各学科の状況を共有した。また、各学科に対して、分析結果についての見解と、状況改善のための実施計画について報告を求めることを決定した。報告内容には、①学科として体系的に科目を提供するという観点での改善、②その体系の中で教員個人が科目を提供するという観点での改善、③その他に学科として教育効果を高めることにつながると考える改善という3つの項目を求めることとした。また、実施する取り組みの効果検証を行うことを決定した。

質的転換答申で示されるように、質を伴った学修時間の増加・確保のためには、教育内容を教員個人に任せるのではなく、組織として体系的に教育課程を構築していくことが必要である。京都光華女子大学で進めている取り組みは、効果検証が今後の課題ではあるものの、質を伴った学修時間の増加確保に向けた組織的な取り組みであり、本報告により、知見の蓄積という貢献が行えると考えられる。

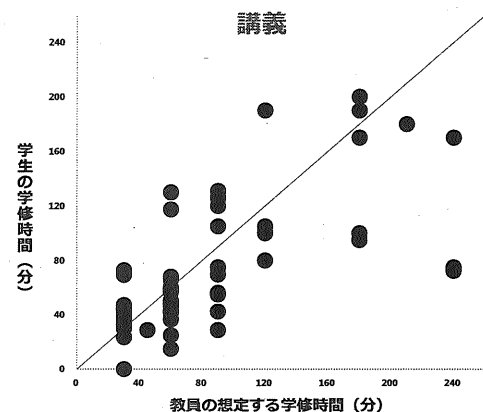


図1：教員の想定と学生の学修時間比較

参考文献

Hashimoto, T. (in press). Bridging faculties' expectation and students' actual studying hours(Poster presentation). 2015 AIR Forum, Denver, Colorado

宮浦崇・山田勉・鳥居朋子・青山佳世(2011) 大学における内部質保証の実現に向けた取り組み：自己点検・評価活動および教学改善活動の現状と課題. 立命館高等教育研究、11：151-166

溝上慎一(2009) 授業・授業外学習による学習タイプと能力や知識の変化・大学教育満足度との関連性：単位制度の実質化を見据えて. 山田礼子(編)大学教育を科学する：学生の教育評価の国際比較 東信堂、東京 pp.119-133

大森不二雄(2012) 大学教育と学修時間：中教審答申を批判的に読み解く. アルカディア学報、494